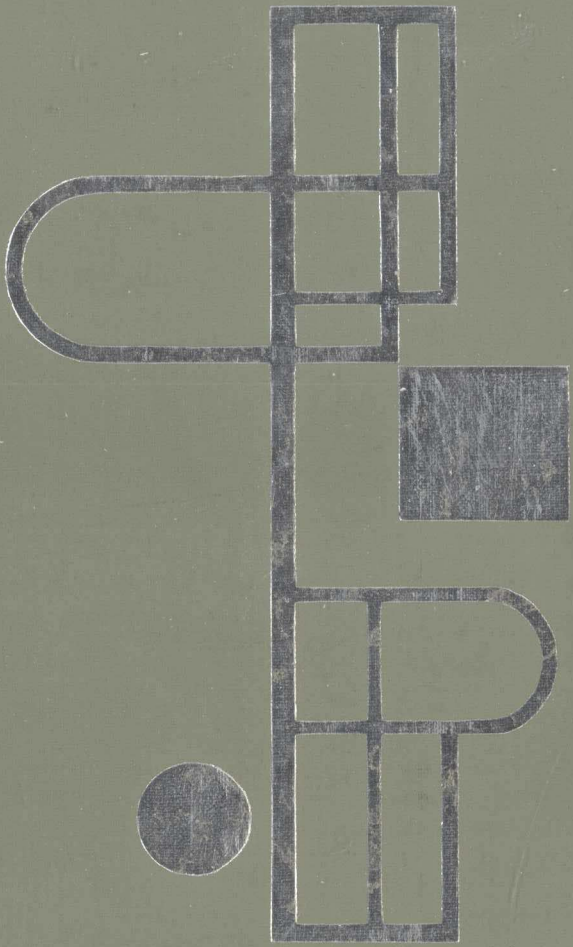
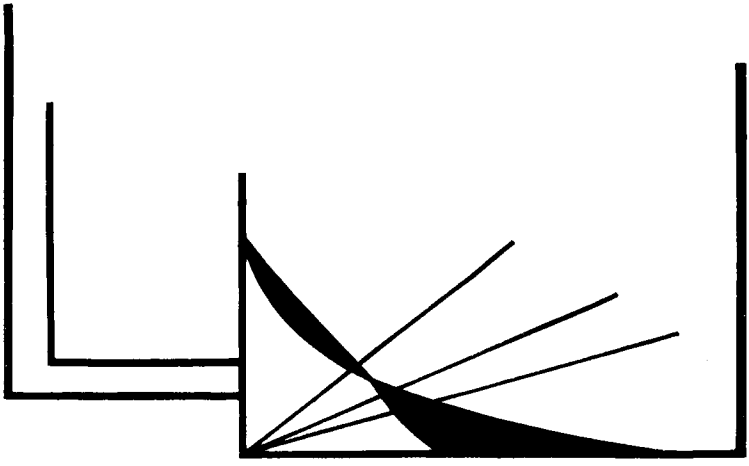


佐多稻子集

新選 現代日本文學全集
11



筑摩書房版

新選 現代日本文學全集 11

佐多稲子集

昭和三十五年八月五日 発行

著者 佐多稲子

発行者 東京都千代田区神田小川町二ノ八 古田晁

印刷者 東京都青梅市根ケ布三八五 山田一雄

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八 筑摩書房

〔電話〕東京(二九)局(四)七六五一(代表)

振替 東京一六五七六八

整版 株式会社精興社

印刷 株式会社精興社

製本 株式会社矢島製本所

佐多稲子集　目次

燃ゆる限り……五
機械のなかの青春……九〇
子供の眼……一六一
今日になつての話……一九二
黄色い煙……一九九
虚偽……二一四
泡沫の記録……二二六
夜の記憶……二三二
ある夜の客……二四〇
管野須賀子……二四八
荒肌……二五七

ばあんばあん……二六四
合唱……二七〇
薄曇りの秋の日……二八〇
人形と笛……二八八
歯車……二九二
佐多稲子の屈折……中島健蔵　四二〇
解説……久保田正文　四二三

装幀　恩地孝四郎
恩地邦郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

佐多稲子集

一

夕方の時間なので、西荻窪の南口は電車の着く度に、階段がいつぱいになるほど人が降りた。妙子はもう小一時間、そのあたりにうろうろして、降りてくる人の中に河野の姿を探していた。色が白く、背もたつぷりして、派手な顔なので、彼女の姿も目立ち易い。妙子は河野の姿を探しながら、自分が役所の同僚などに見つけられるのも避けようとしていた。改札口に近い売店の横に身体を斜めにして立つてみたり、切符売り場のそばにうしろ向きになつていて、横を通つてゆく人の後姿を探したりしていた。駅前の果物店や菓子屋にはもう灯りがついて、ひつきりなしの商売をしていた。

ああ、いやンなつちやう、妙子は胸の中でそんな言葉をつぶやいて、河野の下宿の方へ歩き出していた。オレンジとみどりの縞が波のように重なり合つているワンピースをきて、白エナメルの袋を抱えていた。

ああ、いやンなつちやう、とつぶやきながら妙子は、色白の頬を小さな口元で締めている豊かな顔立ちなので暗い表情には見えない。少しまなじりの下がつた目はうすら笑いさえ浮かべているように見える。けれども妙子は胸のうちで、自分を可哀想がつていた。今夜果してこの時間に河野が帰つてくるのかどうかもたしかめてはいない。むしろ彼女は、不意打ちをしてやろうという力み方できていた。河野の下宿へまつすぐ行つてみることも知つていた。が、それはこわかつた。うたがいの雲がひろがつてきた今は、何度も行つたことのある河野の下宿なのに、いきなりそこへゆくということがとても恐ろしかつた。

ふみ切りぎわの魚屋はもう店を洗つていた。ふみ切りを渡らず線路に沿つて荻窪の方角へもどる通りは、河野の下宿への一本道である。妙子はそこをゆつくりと歩いた。あとから河野がくれば妙子に追いつく筈だ。電車がはげしい音を立てて通つた。妙子は、立ちどまつてそれを見上げ、そしてまたゆるゆるとあともどりをはじめた。河野はたしかに帰つてくるにちがいない、そんな確信があつた。こんなときの女の心理は妙に敏感で、予想が当るものなのだ。妙子はこの道でゆき逢つたときの河野の表情まではつきり見えるような気がしていた。

その敏感さで、河野の下宿の模様も分るような気がして妙子はおののいている。河野の下宿には河野が言うように、妹が上京しているのだろうか。それとも今日たまたま友達の口から聞いたように、河野に妻があつて、その人がきているのだろうか。まさかという気持と、河野の素振りから判断するうたがいとが交り合つている。はつきり言えば、妙子はもう、そのうたがいの方に傾いている。けれどもやつぱり、まさか、とおもう。早く河野に逢つて、この交り合う気持をぶつつけたい。

次のふみ切りへきたとき、下りの電車がまた通つた。電車の中は明かるくて、白い上着の乗客がいつぱい、殆んどどの窓も白の上着で埋まつていた。

今度は来る、と妙子は自分の予想で力むようにして、またあとがえりを始めた。ほら、来た、妙子はその瞬間きゆつと身体を固くした。河野は妙子に気づかず、あまり高くない肩を、少しはすかいに前へ出すような敏しような歩き方で、パン屋の灯りの中に浮き出てきた。男にしてはまつ毛の長い、やや黒目のその顔を見たとき、妙子は、ああ、あの目、とおもつて感覚がうずいた。

そして彼女は黙つてその前へ歩いていつた。

「おツ」

と河野は立ちどまつて、にやつと探るように笑つた。

「どうしたの！」

「あなたの下宿へ行つてきたの」

「ええ、ほんとかい」

「妹さんに逢つてきたの」

「嘘だろう」

「これから行くとこなの」

「よせよ」
「なアぜ？」
「田舎のものだから、びつくりするよ。しかし、ゆくなら行つてもいいよ。行くかい」
「私、今日、変なこと聞いたの」
「なにを？」
「なに、つて、そんなすぐ話せないわ」
「今日は何だか妙だね。そのへんでお茶でものもうか」
駅前の方へ並んで歩き出すと、二人の背は殆んど同じ位に見えた。河野は顔を振り向けてながし目にそそるように妙子に笑いかけて、
「あきれたね、いきなり人を待ち伏せして、僕がもつとおそかつたら、どうしたの？」
「ずいぶん待つたのよ。だけど、きつと逢えるとおもつたわ」
お互いの腕がちらりと触れ、妙子はその温みを、はつとするように感じた。彼女はもう河野と連れ立つていることで、今までの力んでいた気持が、がつくりと落ちていた。
「御飯まだなんだろう。何か食べようか。僕も腹が空いた」
わざと駅前を避けて、小さな中華そば屋へ入つた。脂じみた卓をはさんで向い合うと、河野は煙草に火をつけながら、けむそうな目つきになつて、まじまじと妙子を見た。妙子はその丸い小さい口を尖がらして、鼻の上に皺をよせてみせた。
「どうしたのさ」
と、河野が笑つた。
「私、今日、とつても変なこと聞いたの」
「だから、何をさ」
妙子は、河野に何を、と聞かれると、その答えの言葉が口先きに出せなかつた。言葉にあらわせないほど重大なことで、河野に問い正さなければならないのに、河野に向い合つた妙子は、甘やいだ気分になつている。妙子はそのことで自分におどろいた。妙子は自分を不真面目なのかしら、とさえ、うたがつた。
コック場でじやアじやアと油の音がしている。妙子はねとつくような湯のみを手に持つて伏し目のまま、
「河野さん、ほんとに妹さんなの」
「そうだよ、どうして」
「奥さんじやないの」
「僕に女房があるとおもうのかね。それならそれでもいいよ」
「そんな言い方つて、逆ねじつていうのよ」
「だつて、あんまり変なこと言うからさ」
「お友達に聞いたのよ。あなたに奥さんがあるつて。だから私がちがうでしようつて言つたら、そのお友達、変な顔をして私を見たのよ」
「誰だか知らないが、そんなに僕のことを知つてるのかね。君、僕の部屋にも来て見て知つてるでしよう」
「お郷里の方にいらつしやるんだつて」
「へえ、そうかい」
河野は、むつとしたように壁に背をもたせて、わきを向いた。
「僕もたいした悪ものになつたものだね」
「そうだわ、もしほんとうなら」
「ま、君のいいように考えるさ」
「いいようになんて考えていられないわ。妹さんが来てるからつて、あなたが下宿へ私がゆくことをとめているから、うたがえば、もしやそうかとおもうのよ」
「そいじや、いらつしやいよ。僕はただね」
と、河野は身体をのり出して、
「田舎の人間は、形式主義だから、まだお互いの話を正式にしていないうちに、下宿なんかで顔を合わせると、あとあと、君の印象が損になることを考えているんだ。話も決まらないうちに、若い女が男一人の下宿の部屋に出入りしているなんてことが知れれば、田舎ものには、たいしたふしだらに見られるんだよ」
妙子は、ずけずけと河野に自分のふしだらを指摘されるようで、黙つて下唇を嚙んだ。
「それでも君が僕の下宿へゆくつて言うんなら、行つたつていいんだ。僕はかまわないよ」
「そんなふうに言わなくつたつていいとおもうわ。何だか、私、いじめられているみたいな気がする」
「いじめてなんかいないよ。僕は男だからいいよ。しかし、君は女だからね。田舎は封建的だよ」
運ばれてきた焼そばを前に、河野は胡椒のびんを妙子にとつてやつた。妙子はかぶりを振つ

て、しよげた表情のまま、パシツと割箸を割つた。
「僕、そんなに信用がないかね」
河野は上目づかいで笑いかけた。
「だつて、私、びつくりしたんですもの」
そう言つたら、涙がにじんできて、妙子はそれを指さきではじいて、気弱にほほ笑んだ。
「もう少し信用してくれたつていいじやないか。心細いよ」
「ふふ」
ふくみ笑いをしたとき、妙子の肩さきは柔かく媚をふくんでいた。

二

同じ日のこの時分に、妙子の弟の秀男は、父親の正美と二人で神田駅前の焼とりやに腰をかけていた。正美と妙子と秀男は、よく似ていた。もう一人の妹の昭子だけが父や姉兄に似ていない。正美は若いとき、その色の白いぽつてりとした顔立ちが、品よく鷹揚に見えたものだが、気力のなくなつた今はその顔立ちがむしろ、妙に不気味に青ぶくれて見えた。口ひげだけは今も残して、赤ちやけたワイシャツに、蝶ネクタイを結んでいる。彼は焼酎のコップを握つて、秀男の顔をのぞいていた。
「秀男は、あまり呑まんのだね、焼とりでも食べなさい。いいんだろう、お前、持つてるんだろう」
「ええ」
秀男は自分も焼酎のコップを前において、焼とりの串を指さきでくるくる廻した。
「どうだね。お母さんは相変らずかね」
「ええ」
「妙子や昭子はどうしてる。いや、一度みやげでも持つてゆこう、とおもつているんだがね、昭子の誕生日にも何か送つてやろうとおもつていたんだよ。いや、もうすぐ金の入る当てがあるんだ。そしたら、秀男にも一度おごらねばならんね。今度は、たしかなんだ。そのときは電話をかけるからね。君たち若いものはやつぱり脂くさい料理がいいんだろうな。それとも浅草へでもゆくか。どうだい、君、ストリップというのは見たかね。ははは、はずかしがつている。おじさん、若いものは可愛いいね。僕らのように道楽のあらん限りしつくした人間は、もう何を見ても駄目だね」
と、焼とりの煙りの中で手を振つた。
「どうだい、妙子はまだ嫁入り口でも決まらんかね。あの子はしかし、なかなか現実やだよ。ま、それもしかたがないさ。父さんがちやんとしてやらなかつたから、貧乏の中でああなるしかなかつたのさ。しかし、少し、母さん似だね」
「母さんは、姉さんみたいにしつかりしてませんよ」
「うん、ま、そうだ。母さんより妙子はしつかりしている。母さんには、妙子ほどの頭もない。人がいいばかりだ。しかし、品性がないよ。そのへんが妙子に似ていないか。いや、そりや妙子の方がよつぽどいい、しかし昭子は、あれはちよつと頭がいいよ。父さんはそう睨んでいる。どうだい、ちがうかい。はつはつは」
酔つてきて肩を上げると、ちよび髯のある正美の顔が一層、秀男にはうらぶれた虚勢に見えて辛かつた。言葉づかいだけは昔のようにインテリぶつている。しかし母や姉妹の観察は当つていると、秀男はおもう。この父が、今日も東松下町の会社へ電話をかけてきた用事が、何であるか、もう秀男は察していた。
仲田正美は終戦直後に新京から引揚げてきた。満洲の新聞社に勤めていた筈だが、そこも間もなくやめたらしく、三年間の満洲生活で正美が何をしていたのかよくわからなかつた。東京の自宅への送金もなかつた。妻のかね子は、ある劇場の売店の売子にやとわれて、三人の子どもと暮らしてきた。だから、妙子は高等小学校だけで女学校へはいつていない。秀男は工業学校を出た。昭子も新制の三年でやめた。
正美は引揚げてから一度は知り合いの出版社を頼つて勤めたが、半年でやめた。正美の感覚はもう古かつた。彼はそれが自分でわかると、逃げるように自分でやめた。満洲生活で知り合つた女のところと、子どもたちの家との両方をゆき来していたが、この二年ぐらいは殆んどわが家には帰らなかつた。ときどき逢う子どもたちの目にも、正美の急速にうらぶれてゆくのが見えた。方々借金をして歩いているのが、自宅

の方へ催促がきてわかるようになつた。
「もういつぱい、どうだ。いいかい。はつはつは、息子に呑ませてもらうようになつちや、おしまいだね。おじさん。だが、この息子は孝行ものでね。どうだい、いい息子だろ」
と、正美は秀男の肩を叩いて、焼とりやの主人に胸をそらせて見せた。
「もう、父さん、出ましよう」
「そうか、あと一杯だめか。ま、よし、よし。じや勘定だ」
正美はそう言つて一人先きへふらりと出た。秀男が勘定を払つて出てくると、正美は、腰を曲げて何か拾つている。秀男は、はつとした。正美は秀男に見られたことにも気づいていないように、拾つた煙草に火をつけようとしてマッチを探すらしくズボンのポケットを手で撫でていた。
「お父さん、煙草あります」
「ああ、そうか」
正美は、拾つたものをポケットに入れて、秀男の差し出したバットを一本抜いた。秀男は、マッチをすつてつけてやり、バットの袋を父の胸に入れてやつた。
ガードの上を、があつと音をたてて電車が通つた。秀男はふらふらと歩く父のうしろから、ガード下へと歩いていつた。
正美は、煙草を拾つて、秀男に見つけられたのを、やはり知つていた。
「俺は、この頃、煙草が買えなくて、拾つてのむことがあるよ。人間、落ちぶれると、浅ましくなるね」
秀男は、ぐつと胸が詰まつて、正面をみたまま、唇を嚙んで歩いた。
「おすみがこの頃風邪で寝ているんだよ」
と、正美は、同棲している女の名を言つた。その女は美容師だと聞いていた。店を開く資金がないから、どこかの美容院に通つているということも、秀男は母のかね子から聞いた。
「あれが寝ついてね、俺も困つているんだ。今までさんざん、厄介をかけた女だから、不人情もできずさ。いや俺も、もうすぐ金の入る当てはあるんだがね、それまでなんだ。君、少し無いかね」
「僕、社で借りてきましたから」
「はつはつは、俺が電話をかけたら、たいていい察したね。いや、すまん。どうも不肖の親、ということになつたね」
秀男は、千円札を二枚、正美の手に渡した。
「いいかね。君、困らんかね、いや、できたらすぐ返すよ」
そそくさと、胸のポケットにしまい込んで、
「ほら、君、知つてるだろう、父さんが以前勤めた有光社のおやじさ、知らんかね。そこで、父さんにまた来て片腕になつてくれつて言つていたんだ。昔のよしみもあるしね。少し援けてやろうかともおもつてさ。なに、向うじや、俺を拾い上げてくれるつもりだろう。こちらも大きなことは言えないのさ。しかし、長いこと仕事に離れていると、勝手がわからなくなつてね。勉強しなおさなければいけないとおもつているんだ。一年生からやり直すつもりでかかるさ」
あまり体裁ぶつているのも気が引けたように、自分でがてんがてんをしながらそう言つた。
「俺がそう言つていた、と母さんに言つてくれ。母さんも少しは安心するだろう。どうだいこの頃、母さんはあまりヒステリイはおこさんかね」
「ええ、大丈夫です。父さんどつちへゆくんですか、僕帰りますよ」
「おお、そうか」
正美は急に淋しくなるようにあわてた顔を振り上げて、
「お前に借りた金で、もう一杯というわけにもゆかんね。じや、これはありがたく借りておくよ。だが、秀男どうだい、父さんはまだ若いだろう」
と正美は、息子の前に胸を張つて顔を差し向けた。その子どもらしい虚勢で振り上げた顔に、ネオンの赤と青が明滅した。秀男はそこに立ちどまつて、もう何も言わなかつた。

三

もと陸軍の用地だつた戸山ヶ原は、終戦後に変貌して巨大なアパート街になつていた。鉄筋四階建て、二十四世帯の入るアパートが、四十六棟建つている。それは戦前には、日本のどこにも見ることのできない、西欧式の集団アパー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ト街であつた。妙子たちの一家は、このアパートのできはじめのとき、偶然の仕合せのように、このアパートを借りられた。根岸で焼け出されて、小田急線の下北沢に間借りしていたので、ここへ移つてきたときは、母のかね子と三人の姉弟が、当分の間、おもい出したように顔を見合せては、よかつたねえ、と言つたものだつた。

昭子はそのアパートのわが家へ帰つてきていた。この時間に、姉や兄が誰とどこで逢つているか知るはずはない。母のかね子はもう勤めをやめていた。かね子は、年齢より早く白髪の増えてきた髪を首のところで丸く巻いていた。割烹着をきた姿はまだすらりとしている。面長の尋常な顔立ちだつたが、彼女の目だけは、そのときどきの感情で、がらりと変つた。笑うとすつかり細くなる目が、心配事のあるときは、暗く黒目に沈んだ。今日は機嫌よく茶ぶ台の覆いをとつて、昭子の食事の仕度をしていた。

「みんな、まだ？」

妙子や秀男が父の正美に似て丸顔なのに昭子だけはきつちり締まつた細手の顔をしていた。肌の色もあさ黒いという方で、それは、母のかね子にも似ていない。紺のピケのツウピースを、白いシャツブラウスに着更えて茶ぶ台の前に出てきた。六畳と四畳半の二間つづきで、この部屋は三階に当つていた。窓から柏木の大通りを走る自動車が見え、向うのガードの上を中央線の通るのも見えていた。

「待つてみるかい」

「おなか、空いたわ」

「いいよ、お食べよ。いつ帰るか分りやしない。居残りしてるかもしれないよ。あ、お前に手紙がきていたよ」

「ふん、どこ？」

「ほら、箪笥の上」

昭子はさつと角封筒の手紙をとり上げると、くるりと身体をまわすようにして六畳へもどつてゆき、そこで封を切つた。宮原隆一からの手紙だつた。

彼女は読み終つた手紙を自分の小抽出しに蔵まつて、茶ぶ台にもどつてきた。かね子はしじみの味噌汁をあたためて、小鍋を運んできた。膳の上には小鰺のから揚げが三尾ずつ、つけてある。頭からかりつと嚙んで、

「うまい！」

するとかね子はさも満足したように相づちを打つた。

「廉いねえ、一皿三十円買つて、あしたのお弁当のおかずまで残つたよ。今、小鰺がいちばん廉いよ」

「まだ、あるの？　もつと食べたいな」

「食べたきや食べてもいいけどさ。揚げものだもの、そんなに食べられやしないよ。母さんなんか、揚げてるうちにもうたくさんになつちやつた」

かね子はそう言つて、自分は胡瓜の漬物で食べた。

「さつきの手紙、お友達かい？」

「そうよ」と言つてから、昭子は自分の方から母の頭を撫でるようにつづけた。

「大丈夫よ、母さん」

「そりや、そうだろうけどさ。姉ちやんがまだ片づかないんだからね」

「いやだ、そんな」

くつくと笑つて、

「あつ、のどに詰まる」

かね子もあけつ放しに笑つて、目が細くなつた。

「姉ちやんの話、どうしたもんだろうね。河野さんつていう人、とつても、いい人なのさ。福井の田舎では、もとは大分大きな地主でね。大学は出ているし、それでちつともぶらない人なのよ。すこし、うちには立派すぎるんだよ」

知らないものがそばで聞いていれば、かね子は河野にもう逢つて彼のことをよく知つているとおもうにちがいない。が、かね子は河野にまだ逢つたことがなかつた。かね子は妙子に聞いたままを、もう自分で知つているように話している。彼女のものの言い方はいつもこんなふうだつた。昭子は母の癖を知つている。だから、ちよつと揚げ足をとりたくなる。

「母さんたら、逢つたこともないのに、どうしていい人だの、ぶらない人だの、つて分るのよ」

「私しや逢つたことはないけどさ、妙子がそう言つているもの」

「そりや姉ちやんは、そう言うわよ」

「だけど、妙子の言うことなら、たしかだよ。私なんか逢つたつて、顔見ただけじや、どんな人かわかりつこありやしない」
「母さんはそれだからいけないのよ。第一印象つていうでしよう、ぱつと分るはずよ」
「私はわからないね」
かね子はまた目を細くしてころころつと笑つた。
「私が逢えば分るな」
「そんなら妙子だつて分るだろう」
「そうねえ。じやいい人ね、きつと」
「だけどね、今、妙子に出られちやうとうちは困るよ。ま、そのときは母ちやんももういちど働いてもいいけどさ。仕度は何もしてやれないし、第一、父ちやんが、ちやんとしててくれないからね。父ちやんのことでも調べられたら、ことわられるかも知れない」
と、かね子は瞬間に、暗く目が引つ込んだ。
「そのときはそのときよ。父さんをもらうんじやあるまいし、姉ちやんを気に入つてるのなら、それでいいじやないの。それを何か文句つける人なら、こつちからやめた方がいいわ」
「お前はそう言うけど、そう簡単にゆくものじやないよ」
かね子の目の暗さはいよいよ濃くなる。
「御馳走さま」
と昭子が箸をおくと、かね子は暗い目つきのままで、
「お汁粉もできてるよ」
「もつと早く言えばいいのに。今はいつぱい。あとで食べるわ」
昭子は茶碗を流しへ持つてゆき、水道の栓をあけた。
「いいよ、あとでいつしよに洗うから」
と、かね子が追いかけて言つた。
その夜、前後して妙子と秀男が帰つてきたのは、もう九時すぎだつた。
「あたし、御飯、すませてきたの」
と妙子は、秀男の食べているのを立つたまま見て言つた。
「どこかで食べてきたの？　お汁粉があるよ。それでも食べるかい」
「なんだ母さん、またお汁粉つくつたの？」
「昭子が食べたい食べたいつてこの間から言つてたからさ」
と、かね子が言つている。昭子は明朝着てゆくブラウスにアイロンをかけていて、おやおやと聞いた。
「なによ、昭子、あんた少し贅沢よ」
こちらへ向いた姉の言葉には、昭子は答えなかつた。秀男は味けなさそうに夕刊を見ながらかき込んでいた。
妙子は河野に別れて来るとやつぱり気持が鬱屈した。河野の高びしやな言葉も、ひとりになつて考えると、どこまで信じていいかわからない。かね子は姉娘の不きげんな顔色をうかがうようにして、
「残業だつたのかい」
「ううん」
「河野さんと一緒かい。御馳走になつたの」
「ええ」
「すまないね、お金費わせて」
「妹さんが田舎から来てるのよ」
「ああそうお。どんな人かい」
「私、逢わないから知らないわ」
「ふうん」
と、かね子はふきげんな妙子の声音に、それ以上突つ込んでゆかなかつた。おろおろする気持で、子どもも大きくなると、気兼ねなものだ、と溜息をつくようにおもつている。
「おや、お兄ちやん、お前、お酒のんでるの」
とかね子は今度は秀男の方に今気づいた顔を向けた。
「うん」と、新聞を畳に放つて、
「今日、父さんに逢つたよ」
「あら、どこで？　またお金借りられたんじやないの」
「ううん。ただ焼きとりやで一緒に呑んだんだ」
「どんな恰好してたい」
かね子の表情は、今は夫のことにふれると、目が吊つた。年月の変化のおそろしさは、かね子の目の表情に、まるで目もりのようにあらわれた。若いとき、かね子の目は、正美の話をするたびに、まなじりがすうと下がつて糸のようになつたものだ。それが今は瞬間に吊り上る。
「最近、どこかへ勤めるそうだよ」

「ほんとかね。父ちゃんの、最近、最近つていうのは聞きあきたからね。でもいいよ。よくお金貸せつて言わなかつたものだ。それなら、今度は少し見込みがあるかも知れないね」
「うん」
妙子も昭子も父のことを何も聞き出そうとはしなかつたけれど、かね子が流しへ立つてあと片づけを始めたとき、昭子がそつと秀男に聞いた。
「ほんとに仕事があるらしいの」
「どうだかなア」
その調子を聞きとがめたように妙子が大きな声を出した。
「秀男、あんた、またお金借りられたんでしよう」
「ちがうよ」
「そんならいいけど、いいかげんにしときなさい。私たち何も、父さんなんかに何ひとつしてもらつていないんだからね。迷惑こそかけられているけれど、親ぶられることなんかないんだから」
「およしなさいよ姉ちゃん。父さんだつて可哀想よ。引揚げてきて、仕事がないんじやないの」
と、昭子が口出しをした。妙子は苛々と、クリームを顔にすり込みながら、
「昭子は父さんから迷惑をかけられていないからそう言うんだわ。私なんか、未だにあのときの前借を返すんで毎月差し引かれているのよ。毎月千円ずつ大きいわよ。すぐ着物一枚ぐらいできちやうわよ」
そう言われれば昭子は何も言えなかつた。正美の、二万円という借金の尻を持ち込まれたとき、かね子は、妙子に泣きついてその算段を頼んだ。
秀男はごろりと仰むけになつて腕を頭の下に組んでいた。吸いがらを拾つていた父親の腰つきと、まだ若いだろう、と振り上げた顔が浮かんでいる。秀男のこめかみに一筋涙が流れた。
昭子は、宮原隆一の、母ひとり子ひとりの、それでいて明かるい家庭をおもい出していた。食べたいと言いもしない汁粉などばかり作るのを愛情としているかね子と、隆一の母の重子とはまるで別の母の姿だつた。
「お兄ちやん、ふとん敷くわよ」
と、昭子は秀男に声をかけ、兄の涙を見つけた。かね子はまだ言つている。
「ほんとうに、誰もお汁粉食べないのかい。じや、火をいれとかなきやねえ」

四

読売講堂の前へ昭子が着いたとき、開場を待つ観客がもう入口から列になつて有楽町駅の方へ曲がつていた。昭子は宮原隆一を探しながらその列について曲がつた。新協劇団の「冬の旅」の観客は、若い人が多くて、それも大抵、職場の帰りに廻つて来たというふうに見えて、おのずからな地味な色合がある。昭子は人に混つて歩いてゆき、いちばんおしまいの方に、隆一の姿を見つけた。背の高い隆一は半袖のシャツに、レインハットのくちやくちやになつたのを頭につけて、何かの文庫本を読んでいた。昭子はその前に、ちよん、と弾みをつけるように両足を揃えて立つた。
「あ、来たの」
と、隆一は、文庫本をかくしに押し込んで昭子を見た。
「よつぽど前から来てらつした？」
「ううん、今来たとこ」
「坐れるかしら」
「大丈夫だよ」
隆一は厚味のある唇を形よく結んで、腕時計を見た。
大きな建物ばかりのこの通りは、曇つた空の故もあつて、繁つた並木の下はもう落ちついた夕色がただよつている。あたりのビルディングから退けて帰る人も、有楽町の駅の裏側のようなこの通りでは割合静かに歩いている。
昭子はハンドバックの中にそれだけ別にたたんでおいた札をとり出すと、
「あの、切符のお金」
と、そつと差し出した。
「いいの？　僕、もうすぐ、金、はいるんだ」
「ううん、いいの。この分ちやんと、とつといたの」
「じや、貰つとこう」
隆一は少し照れるように、につとしてそれを

受取つた。列は二人のあとにまた大分つづいて、やがて前の方が動き出した。昭子たちもそれにつづいて歩いてゆく。読売講堂の狭い階段がいつぱいになつて、ぞろぞろと昇つていつた。感想文を書く紙片などが途中で手渡されて五階へ二人が着いたとき、講堂の中はもう殆んど詰まつていたが、隆一が素早く前方の方にすすんで二人の席を見つけた。

舞台には幕がおりていないで、薄暗い中に舞台の装置が客席から見えた。奥の方に縁側のついた座敷で、右手にピアノがあり、左手に長椅子がおいてあつた。その舞台装置のまん中に、説明文を電燈で浮かした板がおいてあつて、地方の一小都市にある関口克子の治療所の座敷、この一間において、それぞれの人間の生き方が展開されるというようなことが書いてある。観客が席についたとき、舞台の幕がもうあいている、というのは、照子には珍らしい。間もなくベルがジジ、、、と鳴り渡つて、舞台正面の説明板がとり去られ、暗闇の中に俳優が登場して、照明が当つた。

医師の克子が右手の前で赤い振袖の着物をたたんでいる。やはり医者である夫の政行が左手の椅子に掛けている。克子のたたんでいる振袖の着物は、政行の次女で克子には義理の娘になる美恵の結婚の衣裳だ。克子はその結婚に反対らしい科白を言う。夫の政行はそれにさからつている。舞台はそういうところから始まつた。

この芝居は細菌戦と医師の良心を扱つたものだつた。夫の政行は、日本の戦争中、満洲で細菌戦部隊にいた。引揚げてきて、一度別れた妻の克子の開業先きへ、二人の娘と一緒に身を寄せていて、どうかしてもう一度うまい道にありつこうとしている。この政行に、満洲時代の同僚が誘いかけ、今度は国際的な細菌戦研究に引ずり込もうとする。それを止めようとする良心的な克子たちとの葛藤があつて、二人の娘の、姉は正しく生きようとし妹は、頭でそれを理解しながら、虚無的に投げやりになつている二様の人物が示される。

妹の美恵は学生の平和運動に参加したりしながら、片方では婚約者と放らつにダンスなどする娘だ。札びらに引かれて細菌戦に加わつてゆく父の卑劣をこの娘は承知しながら止めようとしないでいる。

その娘が、少し甘つたれた口調で、正しいことは知つているけど、自分はそんなふうに強く生きてゆけないのだ、というような科白を言つたとき、観客席に並んでいた隆一は、昭子にちよつと身を寄せるようにして、

「ああいうの、ひとつの流行だね」

とささやいた。昭子は舞台に見入つていて、うん、うん、というようにただうなずいた。

客席は蒸すように暑かつた。休けい時間に傍らの窓があけられると、少し涼しい風が吹いた。ネオンサインの無数に明滅する有楽町の夜景がすぐ目の前にあつた。昭子たちの周囲で風に吹かれている客も、舞台の問題を考えているように、みんな言葉少なだ。昭子もだから黙つていた。が、心の中で舞台の妹娘を考えている。あんなの、ひとつの流行だね、とささやいた隆一の言葉で。

あんなふうな女のひと、いるわ、とおもう。けれども具体的には誰というふうに浮かんでこない。姉の妙子だつてちがう、とおもう。妙子は進歩的な思想だの、そういう動きには無関心だ。もつと、いわば目の前的に現実的だ。貧乏だからなんだわ、と、昭子はおもつた。

舞台はやはり幕はおりていない、照明が消えれば舞台は終り、照明がついてまた始まる。

舞台の政行は、妻の克子の止めるのを振り切つて、札びらに引かれて出て行つてしまう。そのあとに妹娘の美恵の自殺、妻の克子は、そういう夫の子どもを宿して、夫の今後の生涯に半ば哀れみをふくめた憤りで、

「冬の旅！」

と、つぶやく。

細菌戦などに、しかも国際的な手先きになつて加わつてゆく医師政行の今後の生涯は、人間の温みを自ら失い人間的道からもはなれた、寒い、寒い冬の旅なのだ。

今度の朝鮮戦争でアメリカが細菌をばらまいたというので、北鮮や中共から抗議の出ているのを昭子も、新聞やそのほかのもので読んで知つているので、この芝居の意味が分つた。終幕後また読売講堂の階段をぞろぞろとおりてゆきながら、昭子はやはり黙つている。彼女は、こ

の芝居の観客層のまん中で、何か、ちょうちようとしやべれない気おくれがある。彼女はそんなふうに怜悧で素直だつた。
「おもしろかつた？」
と、外へ出て二人並んだとき、隆一が言つた。
「おもしろかつたわ。新協は、変に、こねくつたふうに芝居しないから好き」
「そうね」
「あたし、さつき、そうおもつたの。あの美恵つて妹の方ね、あなた、この頃はやりのタイプだつて言つたでしよう。私もね、あんなふうな人、いるような気もしたの。だけど、私の知つている人では、誰つて具体的におもい出せないの。私のまわりなんて、もつと生活に追いまくられているから、あんなふうに思想的でもない代りに、あんなふうにひねくれてもいないわ」
「ああ、そう？　なるほどね」
「実際に、あんな人いるかしら」
「いるよ。僕の知つているある女子大学生、この間まで左翼だつたとおもうと、その次にはクリスチャンになつて、今じや指輪をはめて、大会社のタイピストさ」
「左翼を嫌い、つて人はたくさんいるわ。だけど、そんな人でも、生活的にはとても真面目よ。無駄づかいをしないで、つつましくブラウスの一枚も作りましよう、つていう人たちね。うちの姉さんなんか、その組」
「君の姉さん、そう。兄さんは？」
「兄さんも大体そうね」
「善良な人たちなんだな」
「そうかしら」
「まあそうだよ。僕、さつきの妹娘のような人間が、いちばん嫌いだな。利口ぶつて、生意気なくせに、何もしないんだ。自分が何もしないだけならいいが、他を軽蔑しているんだ。僕、ああいうの一番嫌いだ！」
「そうねえ」
昭子は、そういう隆一を信頼する。
「わかるわ。あなたはそういう人だわ」
「君はどう？　ブラウスを縫う方？」
「そりや、私だつて、ブラウスは縫うわ。だつて、その方が安上りですもの」
「そりや、そうだ」
はつはつは、と隆一が先きに笑い出し、昭子も一緒に腰を曲げて笑つた。
「ソフトアイスクリームつてのを食べようよ。僕この間からあいつを食べようとおもつてたのしみにしてるんだ」
「いやだ、子どもみたいね」
「いいよウ、あの、ソフトアイスクリーム、つての。こう、手に持つて食べるの、たのしいじやないか。少々、植民地的かな」
「まあいいわ。食べましようよ」
ガードを抜けた向うの横町で、やがて二人は向い合つて、ソフトアイスクリームをなめ始めた。隆一がにやつとした。昭子は、ぷつと吹き出しそうになつて下を向いた。
「もうひとつ楽しみにしてることがあるんだよ」
と隆一が言つた。
「なアに」
「久木先生の仕事がすんで、ちかいうちにその金をくれるらしいんだ。そしたら、それで僕は買いたい本があるんだ。それから月謝を払つて……おふくろがその金が入つたら月謝を払つておけつて言うんだ。細いすねだからだつてさ。ま、それで月謝を払つて、それから、おふくろさんと君に、素晴らしい西洋料理をおごるよ。久木先生に一度御馳走になつて、僕、この世にこんなうまいものがあるのか、とおもつたよ。何月生れの、若鶏の、ももの肉の、クリーム煮、つてのだよ。だから、おふくろさんと、そして君にそれをおごるよ」
「何月生れ、なんて、それは嘘でしよう」
「なんだか、そんなふうに長い名前なんだ」
「お母さんと、私も一緒？」
「うん」
隆一は、そう答えてから、ちよつと意味ありげな目になつて、
「そんなふうにして、おふくろさんに君を知つてもらうんだ。もう大体、察しはついてるがね」
昭子は、あつさりというように微笑してうなずいたが、ふうつとその微笑に暗い陰がさした。昭子は父のことをおもい、家庭のことを考えたのだ。隆一はそれには気づかず、クリームの最後を、殻ごと、むしやむしや食べていた。

五

雑司ヶ谷の東大病院分室の廊下で、隆一の母の重子は丁度今入院した産婦を、病室から分娩室へ抱えるようにして連れてゆくところだつた。寝巻きに着かえた若い産婦は、重子と看護婦に連れ添われて、廊下を小走りに歩きながらも苦痛に顔を歪めていた。そのあとから産婦の夫がうろうろした表情でついてゆく。

産婦だけ分娩室へ連れ込まれると、すぐ出てきた看護婦が、廊下の夫に詰問するように言つている。

「赤ちゃんの着物はどうなすつたのですか」

「それがあの、あとから母親が持つてくることになつているんですが。こんなに早いとおもわなかつたものですから」

「もうお近いですよ。おみえになつたら、すぐ用意して下さい」

「はあ」

と言つたが、産婦の夫はうろうろして窓から外を覗くしかない。が、待つている母親の姿は見えないので、彼は一層うろうろしている。分娩室で、産婦のうめく声が聞こえている。看護婦は忙しそうに出入りし、また聞いた。

「まだ赤ちゃんの着物きません？　産婦さんを連れてくるのに、赤ちゃんの着物の仕度をしないでどうなすつたんですか」

「はあ、どうもすみません」

そして、また窓の外ばかり覗いている。

助産婦の重子は分娩室に入つたままだ。また看護婦が今度は飛び出すように出てきた。

「お母さんの着物でもいいですから、お貸しになつて下さい」

「はあ」

夫は病室へ飛んでゆき、産婦の着かえたお召しの着物をくしやくしやにして抱えてきた。看護婦はあわただしく、少しおこつたようにそれを受けとると分娩室へ消えた。廊下に立つて、夫はやつと少しほつとしたように、それでもまだ窓の外を見ている。やがて彼は、はつとしたように身体の向きを変えて、感動した面持ちで聞き入つた。分娩室で、元気に泣く赤子の産声が聞こえたのである。夫は殆んど自分も泣き出しそうな顔をしていた。赤ん坊は元気に泣きつづけて、それは廊下までよく聞こえた。

ああ、あれが一人の人間のこの世に生を受けた最初の声か、夫の胸中にはそんなおもいが湧いているのであろう。

暫く経つてから、分娩室の戸があいたとき、重子は、もう泣きやんだ赤ん坊を抱いて出てきた。

「男のお子さんでございますよ。御安産で、おめでとうございます」

紫縞の派手なお召しの下にガーゼを敷いた母親の着物に、赤ん坊はくるまつていた。そのあとから産婦が看護婦にすつかり抱え上げられて自分の部屋に帰つてゆく。苦痛に堪え、安心でぐつたりとなつた産婦は、看護婦の首に両手を巻きつけて抱かれていて、蒼い顔をしていた。重子はそのあとから、赤ん坊を抱いて従いてゆき、母親のベッドの中にそつと差し入れた。

「どうもありがとうございました」

「赤ちゃんの着物が間に合わないくらい御安産で、まあよございましたわ」

と、重子は笑つた。

「どうも不注意で……」

と、夫がそばで赤ん坊をのぞきながら恐縮した表情で言う。

「お母さまは少し、静かにおやすみになつて下さい」

そのとき、産婦の母親らしい年配の婦人が包みを抱えて入つてきて、

「まあ、もう生まれたの」

重子は軽くその挨拶に応えながら、部屋を出た。

そのとき廊下をこちらへ来る隆一と昭子に逢つた。

「むかえに寄つたんですよ。今日はもういいんでしよう」

重子は昭子のおじぎに自分も返しながら、

「今日は丁度、今お産があつてね。もうすんだとこ」

「あ、そう。じや、くたびれたでしよう」

「でも、今日はもう帰つてもいいんですよ」

重子は、今日二人がここへ来るのを昨日隆一から聞いているので知つていた。控室へ隆一たちを連れて入り、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com